

【論文提出者】 家中茂

【論文題目】 村の環境社会史—生活環境主義の資源論的展開

【授与する学位の種類】 博士（文学）

【論文審査の結果の要旨】

村落というコミュニティにおける資源のあり方を、環境社会学の分析枠組みの一つである「生活環境主義」を用いて分析した論文である。これまで「生活環境主義」は、農村社会学の主要な研究手法である生活組織分析をベースに、主に農村地域における環境問題を考察してきた。本論文では、その考察の射程を資源論的に拡張することを意図し、これまで二分される傾向にあった生活組織の研究と資源利用研究であるコモンズ研究の統合を村の環境社会史という記述的方法によって試みている。

コミュニティにおける資源管理に注目してきた研究に「コモンズ論」がある。本論文の獨創性は、コモンズをコミュニティに備わる固定的な資源管理システムではなく、そのときどきの状況の変化に応じて生活維持のために生成される重層的で動的な資源管理の仕組みとして理解するという、生成論という視点の提起にある。

序章において、筆者は、コモンズ生成という視点を事例分析に生かす方法として、住民の記憶にある近過去を起点とする生活環境主義の環境史研究に注目する。その方法の資源論への拡張のために、既存のコモンズ研究を広く検討し、これまで十分議論されてこなかった社会学および人類学の資源研究・生業研究の知見が、重層的で動的なコモンズ生成過程の分析と記述に有効であるとする。

そのうえで、筆者は、第1章において、海や山の利用をめぐる事例をとりあげ、生成されるコモンズのあり方を、背後にある生活組織と関連付けながら記述的に示している。さらに、第2章では、沖縄県の恩納村および慶良間諸島という2つの地域のサンゴ礁資源の持続的利用の例を取り上げ、多様なステークホルダーが相互作用しながら、新たな海の利用秩序が形成されていくプロセスを分析している。第3章は、沖縄県の竹富島の事例をとりあげ、島のおかれた自然条件や歴史的経緯、さらに、そのときどきの状況に応じて変化する社会条件のなかで、自然と関わる人々が生業をおこし、生活を組み立ててきたプロセスを「景観」をキーワードに考察している。これに対し、第4章では山の利用をとりあげ、過疎、高齢化によるアンダーユースが憂慮される林業において、オルターナティブな林業として注目されている「自伐林業」を素材に、森林との関わりの再生を分析している。

結論部では、各章でえられた知見をもとに、既存のコモンズ研究における公、共、私という所有形態の類型化および、この類型化を前提とした「共」的資源管理システムというモデルを検討し、実際にはそれらの所有形態が、時代や場所、そして社会状況により、相互に重なり合い、浸透しあい、もつれあっていること、むしろ、それらの所有形態の相互転換のなかにこそ、コモンズ生成のダイナミックスが見いだされるところとしている。さらに、その生成のダイナミックスを住民の思考にそって提示する方法として環境社会史という記述法の必要性を提起している。

以上の内容をもつ本論文は、コモンズ生成論としてすでに社会的に評価の高い論文を再構成することで成立しており、視点の明瞭さ、長年にわたる膨大な調査データ提示という点で博士学位請求論文に十分値するものである。環境社会史という手法の説明についてやや不足を感じさせるものの、それは本研究の基本的な価値を損なうものではないと判断する。よって、本審査委員会は全員一致で合格と判定した。

【最終試験の結果の要旨】

提出された論文および、論文要旨にそって、各審査委員から質疑が行われた。質疑としては、第1に、コモンズの起源が歴史的にどこまでさかのぼれるのかという点が質問された。これに対して、家中氏は、本論文が住民の記憶にある近過去を起点としたタイムスパンでの分析であること、生成のプロセスを内在的に理解するためにそのような時間軸を採用したと回答した。第2に、生活環境主義は日本の農村地域の環境問題研究から登場した論理だが、欧米の環境問題の潮流のなかで位置付ける考えはあるか、さらに、集落ぐるみの空港反対決議をあげた住民は一枚岩と考えてよいのかという点が質問された。関連する質問として、空港建設問題において反対派、賛成派の違いをもたらした要因とは何かという質問があった。これに対して、氏は、今回の自分の研究は生活組織分析を基本としているために欧米の諸理論の参照は控えたこと、さらに、反対決議はコモンズ生成論の立場から言えば暫定的なものであり意見の不一致が解消されたわけではないこと、さらに、反対派、賛成派の違いについては利害要因が大きいと回答した。ただし、生活体験の共有は意見の違いを超えて住民としての決定順守にとってプラスに作用しているとも指摘した。第3に、空港反対決議の背景にある海とのかかわりについての共通体験は、集合意識としても理解できるが、これは生成されたものか、もともとあったものなのかという質問があった。関連して、日本においてコモンズを生成させるほどの自然と関わる経験を今後も期待できるのかという質問もあった。氏は、集合意識という見方から言えば、近現代の歴史的な状況のなかで形成されたものといえること、さらに自然との関わりは事例地では持続しているものの、その一般化については他日を期したいと回答した。

最終試験後、審査委員のみで協議を行い、口頭試問における質疑応答においては、おおむね適切な回答がなされたと判断し、全員一致で合格と判定した。

【審査委員会】

主査 牧野厚史
委員 小畑弘己
委員 中川輝彦
委員 松浦 雄介
委員 鹿嶋洋
委員 山本努